

## 国内経済情勢

### 概 観

設備投資は根強い増加基調をたどっており、輸出数量も幾分増勢を鈍化しつつも、依然高水準にある。反面個人消費はなお伸び悩みを続けている。こうした状況下、在庫投資面では、流通、ユーザー段階の買控え姿勢が続き、素材関連メーカーでは引続き生産を抑制して製品在庫の調整を図っている。

9月の商品市況は、秋需の出足の鈍さや為替円高の進展などから製品先安観が依然根強く、総じて軟調裡に推移した。9月の卸売物価は為替円高の影響も加わって引続き落ち着いた推移をたどっているが、消費者物価は冷夏による野菜の急騰を主因に大幅な上昇を示した。

金融面をみると、8月のマネーサプライの前年比伸び率は、実物取引の増勢鈍化や高利回り資産へのシフトの動きを映じて引続き低下した。一方、8月の全国銀行貸出約定平均金利は公定歩合引下げ等を映じて小幅ながら低下に転じた。

8月の国際収支をみると、輸入の大幅減少などから貿易収支(季節調整後)が5月に次いで本年2度目の黒字となり、また長期資本収支も対日証券投資の増加から大幅流入超を示したため、総合収支の黒字幅は前月比拡大した。こうした状況下、9月の為替相場は、イラン、イラク紛争勃発直後の一時期を除きおおむね円高歩調をたどった。

### 生産、出荷は大幅減少

8月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比\*、速報)は-3.8%(前月+0.5%)、また出荷(速報)も-4.2%(前月-0.1%)と、いずれも大幅に減少した。この間、生産者製品在庫(速報)は-0.1%(前月+2.0%)と4ヵ月ぶりに微減となった。

\* 以下増減率は特に断わらない限り前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

財別の特徴をみると、耐久消費財の生産が微増となったのを除き、各財の生産、出荷とも減少を示した。特に生産財(アルミ圧延品、エチレン、板紙等)、建設財(小形棒鋼、鉄骨等)では、夏季休暇を利用した大幅減産が実施され、また出荷も流通、ユーザー筋の買控えや官公需、住宅投資等末端実需の伸び悩みなどから引続き減少した。また当月は資本財についても前月著増をみた自動車や月々振れの大きい化学機械の落込みなどから著減がみられた。

この間、製品在庫の動きをみると、資本財、消費財が減少したものの、生産財、建設財はメーカーの本格減産の実施にもかかわらず引続き増加した。

国内最終需要の動向をみると、まず設備投資関係では、8月の機械受注額(船舶を除く民需)は、前月+8.3%のあと-12.4%となったが、前年対比では+17.6%と依然高水準を続けている(前月+18.0%)。

消費面では、8月の全国百貨店売上高(通産省調べ、前年比、速報)は前月不ぞえ(+6.1%)のあ

と曜日要因もあって +9.9%の伸びとなった。品目別には衣料品が秋冬物の早期売上の奏効などからやや回復したものの、家電製品は引続き低調裡に推移した。また9月の乗用車新車登録台数(除く軽、前年比、速報)もモデル・チェンジによる拡販努力にもかかわらず -10.2%と4月以降6か月連続して前年水準を下回った。

財政支出面では、8月の公共事業契約額(前年比)は3.3%の小幅増加にとどまったが、9月の公共事業請負額は冷害地域等における地方公共団体の厚めの発注などを映じて +11.4%の伸びとなった。

雇用情勢をみると、8月の有効求人倍率は0.74倍と幾分低下した(前月0.77倍)が、常用雇用、完全失業率とも前月比横ばいに推移した。

#### 卸売物価は微落

9月の商品市況をみると、秋需の出足低調に伴う需給引緩み感の持続や円高による原料コスト安などを背景に製品先安観が続き、流通、ユーザー筋が買控え姿勢を改めていないため、総じて軟調裡に推移した。品目別には、厚板、石油(ガソリン、中間留分)が上伸したものの、合繊、製材、C重油が続落し、8月に反転上昇した棒鋼、合板も減産の足並みの乱れもあって反落した。

9月の卸売物価は、鋼材、原油、原料炭等の輸出入品が為替円高の影響を主因に低下したほか、国内完成品も引続き落ち着いた動きを示したため -0.3%と3か月ぶりに下落した(前年同月比 +15.5%)。

9月の消費者物価(東京、速報)は、冷夏の影響による野菜の急騰や秋冬物衣料の高値出回りなどから1.7%の大幅上昇を示し(前月 -0.2%)、前年比上昇率は +8.9%の高水準となった(前月 +8.5

%)。もっとも、季節商品を除くベースでは +8.3%と前月(+8.8%)を下回った。

#### マネーサプライ伸び率は引続き鈍化

9月の銀行券月中平均発行残高(前年比)は、個人消費の伸び悩みなどを映じて +4.4%の伸びにとどまった。一方、財政資金については、税収の好伸や郵便貯金の増加等から前年(払超1,752億円)とは様変りの揚超(2,011億円)となった。9月の金融市場は、こうした財政資金の動き等を映じ1,419億円の資金不足(前年同316億円)となり、日本銀行は手形買オペレーション等によりこれを調整した。

この間、コールレート(無条件物、中心レート)は月中0.3125%の低下(月末11.3125%)となったが、手形売買レート(2山越)は外銀筋の売り圧力や現先レートのじり高の影響等から強含み保合い圏内の動きに終始した(月中 +0~0.0625%、月末11.50%)。

8月のマネーサプライ(M<sub>2</sub>+CD、前年比)は、現金通貨の伸び率低下に加え、預金通貨も実物取引の増勢鈍化や高利回り資産へのシフトの動きなどを映じて前年水準を下回ったため、+8.3%と前月(+8.8%)に比べさらに低下した。また、8月の全国銀行貸出約定平均金利は -0.018%と54年3月以来17か月ぶりに低下に転じた。

9月の公社債市況をみると、月初一時的に上伸したが、その後は信託、農林系などの大口需要に依然動意がうかがわれず、またポジション悪化をみた地、相銀の売りもあって、じり安歩調をたどった。一方、株式市況は前月来の地合いをうけて続伸したあと、イラン、イラク紛争の拡大をいや気して一時期下げる場面もみられたが、外人買いが再び活発化したため月末には既往ピーク水準を

更新した(東証指数月末488.79、月中+10.23)。

#### 為替相場は一段と円高化

8月の輸出(通関、ドルベース)は1.6%(前月+1.1%)の減少となり、数量ベースの前年比も17.7%増(前月+25.1%)と伸びが鈍化した。品目別には、鉄鋼、化学肥料などの素材関連品目が数量減から金額ベースでも減少し、また機械類では、自動車やプラント類が好伸したものの、前月著伸の弱電が反動減を示した。

一方、8月の輸入(通関、ドルベース)は13.7%減(前月+0.3%)、数量ベースの前年比も12.4%減(前月-0.2%)といずれも大幅な減少となった。品目別には、原油、鉄鋼原材料(鉄鉱石、石炭等)、綿花など多くの品目が数量減を主因に前月より減少し、なかでも内需不振の木材は数量、価格とも

前年水準を下回った。

8月の国際収支は、上記輸出入動向を映じて貿易収支(季節調整後)が696百万ドルの黒字となり(前月427百万ドルの赤字)、経常収支(同)の赤字幅も482百万ドルと前月(同1,570百万ドル)比縮小した。この間、長期資本収支は、対日証券投資の増加を主因に大幅流入超となり、この結果、総合収支は879百万ドルの黒字と黒字幅を一段と拡大した(前月同322百万ドル)。

9月のインターバンク米ドル直物相場は、イラン、イラク紛争勃発直後やや円安化したが、その後再び円高に転じ、212円で越月した(月中7円20銭の円高)。

(昭和55年10月14日)